『西南アジア研究』No.44, 1996

Jos J.L. Gommans 著 *The Rise of the Indo-Afghan Empire c. 1710-1780.* (E.J. Brill [Brill's Indological Library 8], Leiden, 1995, xviii +212 pp.)

真 下 裕 之

本書は，アフガーンの一部族 Abdālī 部族の首長 Aḥmad Šāh Abdālī を祖とする Durrānī 朝(1747-1842)を直接の対象とするものである。とはいえ叙述の少なからぬ部分が，その宗主権下にあった北インド Rōhīlkhand のアフガーンの複数の政権(著者の用語法に従えば Afġān Riyāsat)についても割かれている。それゆえ本書は Durrānī 朝に関する研究であると同時に，同時代のインドにおけるアフガーンに関する研究とも見なされるべきものである。

本書が対象とする18世紀のインドは，研究史においては「後期ムガル朝」時代に含まれる。Awrangzīb の死(1707)をもってその開始のメルクマールとするこの時代にはムガル朝の支配力が弱まり地方政権が各地に成立する。Awadh のシーア＝ナワーブ政権，Ḥaydarābād のニザーム政権，マラータ政権，Pangāb のスィク勢力，Rāgasthān のラージュプト諸侯，そして本書で扱われる北インド Rōhīlkhand のアフガーン諸政権などがそれである。また同世紀なかばには Durrānī 朝軍が数度にわたって Pangāb を経て北インドに侵攻し，1761年の Pānīpath 戦ではマラータの軍勢を撃破するに至った。

17世紀以降，Rōhīlkhand (Rōhīkhand は，北がヒマラヤ山脈，南西がガンジス河に区切られ，東は Awadh に接する地域である。ムガル朝時代の行政管区の上では，Sanbhal, Badā'ūn のふたつの sarkār がこの地域にほぼ相当する)にはアフガーンの移住の波があらたに押し寄せてきていた。Rōhīlla と呼ばれた彼らはムガル朝政権からジャーギールを得て，従来からいたラージュプトたちの支配を排除して同地に定着していた。18世紀においてこれらのアフガーンは，ムガル朝宮廷内部の抗争に関与したり，Awadh のシーア＝ナワーブ政権やマラータ政権と抗争を繰り広げたりした。かくのごとくこれらアフガーンの諸政権は，1774年における Awadh 政権の攻勢に敗北してあいついで消滅するまで，同時代の北インドの政局の中で重要な位置を占めていた。

以上の如き地方政権それぞれについて近年有意義な研究が示されてきているが，ひとりアフガーンについての研究は通史的な叙述(Iqbal Husain, *The Ruhela Chieftaincies : The Rise and Fall of Ruhela Power in India in the Eighteenth Century*, Delhi, 1994.)，ないしは Jadunath Sarkar の一連のごく個別的な叙述を除いて比較的手簿な状況にあった。また Durrānī 朝に関しては Ю. В. Ганковский, *Империя Дуррани*, Москва, 1958 の他には専著は見られない。本書はこのような研究史上の欠落を補うものとして意義づけられる。いっぽう本書は，同時代のインドをとりまく国際的な商業・軍事・人の交流に関しての研究の側面をも大いに

有しており，とくに中央アジアとの関係においてこれらを位置付けようとする試みは紹介に値する意義を持つものであると判断された。

本書はLeiden大学Kern Instituteに1993年に提出された著者のPh. D.論文をもとに書かれたものである。年代記・史書や「馬書」(Faras Nāma)などの同時代のペルシア語史料，ヨーロッパ語の旅行記史料，イギリス東インド会社関係の英語史料などが一次史料として用られている。著者Jos J.L. Gommans氏は本書の内容にかかわる論考をいくつかすでに発表しており，それらからは氏が主たる関心を18世紀のインドと中央アジアとの関係に向けていることがわかる。(Jos J.L. Gommans, Mughal India and Central Asia in the Eighteenth Century : An Introduction to a Wider Perspective, *Itinerario*, 15-1, 1991, 51-70 ; *do.*, Horse Trade in Eighteenth-Century South Asia, *JESHO*, 37, 1994, 228-250.)

以下，本書の内容の紹介をつづける。

「序章」[1-12](ページ番号は[ ]内に示す。以下同様。)：ここでは本書の議論の前提が三点設定される。

1：18世紀ユーラシア大陸全般における内陸貿易の活発さ，またその貿易あるいは軍役にかかわった諸部族の富裕化が指摘され，同時代のインドにおいてもムガル朝の政治的衰退にかかわりなく，農業・商業の持続的発展が見られたとされる。そのうえで著者は北インドのアフガーン部族の政権下での定住農耕と牧畜の複合による「二元経済」に言及する一方，彼らによって担われて活発化した貿易での主要な品目としてとくに馬に注意を喚起する。

2：史料上に現れるAfġān, Pathān, Rōhīllaの3つのタームについてそれぞれの術語法が確定される。RōhīllaはRōh出身者を意味する。Rōhとは，17世紀のインドで書かれた文献に初めて現れる地理概念であり，北はSwāt, Bagaurから南はSindのSībī, Bhakkarまで，東はḤasan Abdālから西はKābul, Qandahārにまでいたる地域であるとされる。

3：本書に関係する地域である中央アジアおよびアフガーニスターンについて地理上の範囲を確定する。著者はアフガーニスターンの地理上の位置がインド・中央アジア・イランそれぞれに重なり合っていることを重視する。そして著者は前近代の研究に際しては，中央アジアとインドとが，イランと「中東東部」(マシュリク)とをふくむより広い文化的共通世界(ecumene)の一部として，関連づけて研究されるべきであるとの視点を述べる。

第一章「中央アジア・インドにおける貿易と帝国」[13-43]：本章はDurrānī朝およびRōhīlkhandのアフガーン諸政権の経済上の裏付けを，同時代の広範囲な枠組みの中で位置付けようとするものである。著者はその枠組みの基本を中央アジア・インド間の貿易関係に見いだそうとする。そのうえでDurrānī朝とRōhīlkhandのアフガーン諸政権との貿易上の関係が指摘される。

著者によれば，中央アジアにおけるロシアおよび中国(China)の政治的な勢力拡大が18世紀

のインドの政治経済に影響を及ぼしたという。前者にかんしては，ヒヴァ・ブハラ・カシュガルへの貿易路を統制するオレンブルグ＝イルティシュ要塞線の構築(1738)が中央アジア，ひいてはインドとの貿易を促進したと指摘する。これについて著者はとくにインドからの正金の流出に注目しており，18世紀最後の四半世紀を通じてロシア国内産銀が増加し，かつインド産の金銀資源が枯渇したことによって正金流出が激減するまでは，この傾向が続いたとする。いっぽう中国の勢力拡大として，18世紀半ばに清朝がジュンガリア・カシュガル・ティベットを併合した事実があげられている。

以上のような中央アジアの情勢に影響を受けて生じたインドでの政治的変化の現れを著者は Durrānī 朝政権および Rōhīlkhand のアフガーン政権の勃興に見いだし，これらアフガーン諸政権を支えた経済上の背景を示す。Qandahār に依拠していた Abdālī 部がNādir Šāh 政権の瓦解の後に Durrānī 朝を立て(1747)，Sind, Makrān, Balūčistān を併合すると，諸部族の抗争によって政治的に混乱するイランを通らずに，Karāčī, Čah Bahar などの Sind の諸港からバスラないしはマスカトへと至るルートが同朝の支配下で発展したこと，その結果ペルシア湾・ホラーサーン間の内陸貿易は Qandahār, Multān を経て Sindへのルートに一転し，Makrān, Sind の諸港は Guǧarāt の Sūrat をも凌ぐ発展を現出したことが示される。またこの時期に，アフガーニスターン本土もインドとの商業上の関わりを増大させ，Šikārpur, Multān, Derā Ġāzī Ḫān, Qandahār, Kābul などの諸都市に Durrānī 朝支配者の誘致によってヒンドゥーの両替商たちが植民してきていたという。中でも主要な中心地であった Šikārpur からのエージェントや為替手形は果てはアストラハン・カルカッタ・マスカト・サマルカンドでも見られるほどであったという。

また著者は，中央アジアとインドとをつないでいたのは北西辺境ルートのみではなかったとして，ヒマラヤ山脈のいくつかの峠をへてヤルカンド・ガルトク・ラサに至るルートにも注意を喚起する。著者はヒマラヤ山中の聖地に向かうヒンドゥー巡礼者によって担われた聖地での定期市あるいは Kašmīr 出身の商人たちの活動から，これらのルートがつとに貿易路として重要であったことを示す。そして Rōhīlkhand のアフガーン諸政権がこの貿易ルート上に勢力を拡大して貿易の振興をはかっていた上，この貿易において必要とされた銀貨を Kašmīr の Srinagar で製造していたのは，Rōhīlkhand の一中心地 Nagībābād 出身の両替商たちであったという。

そのうえで著者は Rōhīlkhand が上述の如き北方とのルートを含めた同時代の各方面からの貿易網の中で重要な位置を占めていたと主張する。ここで著者が援用するのは，従来の東西の枢軸路たる Bengal-Āgra-Lāhor-Kābul ルートが18世紀には北寄りにシフトして，Awadh, Farruḫābād を経て Rōhīlkhand に至り，同地から Delhi, Panǧāb を通らずに Kašmīr を経て Pešāwar, Kābul に達するルートが主流になったという通説である。著者は，Rōhīlkhand を経由するこのルートの成立に，アフガーニスターンに依拠する Durrānī 朝と Rōhīlkhand に依拠するアフガーン首長諸政権との商業上の緊密な関係を見いだそうとする。そして北インドの

従来の経済的中心地が他へ移ったのは中央アジアとの貿易によるものであり，その貿易が「財政上の資源を再編成し，その結果として Durrānī と Rōhīlla との新たな政治的連合をつくり出すのに寄与した」[43] との枠組みを描く。

第二章「Durrānī 朝の帝国支配」[45-66]：第一章でアフガーン諸政権の経済上の裏付けが示されたのに対して，本章では Durrānī 朝の政治面での位置づけが試みられている。著者によれば，18世紀に前後する時代においてイラン・インド・中央アジアの各地域にあらわれた新たな諸政権は自らの支配を正当化するために従前の王朝の権威を利用していた。著者は同時代のこれらのパターンに照らして，Durrānī 朝の興隆は注目すべきであると考える。すなわち同王朝はムガル朝やサファヴィー家ないしはチンギス＝ハーン家を戴くことをせず，そのかわりに「イラン＝イスラーム的普遍主義にたつ Durrānī 朝特有の形態を創出した」[47] というのである。著者は Durrānī 朝のこうした立場を「帝国支配(imperialism)」と見なし，同朝の展開していたイラン・インド・中央アジアのそれぞれの地域ごとに，その「帝国支配」を説明しようと試みる。そのうち本書の行論からして主要な位置を占める Durrānī 朝と Rōhīlkhand 諸政権との関係についての議論のみ紹介しよう。著者は Aḥmad Šāh Durrānī の度重なる対インド遠征にはジャート・マラータといった「偶像崇拝者」に領土を脅かされる Rōhīlkhand のアフガーン支援のために行われた面があると指摘する。この背景として著者があげるのは両者の共有していた前述の如き中央アジアとの貿易網の利害である。そして1750年代後半以降，Rōhīlkhand のアフガーン諸政権は Durrānī 朝の宗主権を認め，Aḥmad Šāh Pādšāh の名において貨幣が打刻されるようになったという。

第三章「インドにおける馬の飼養と貿易」[68-101]：本章は「序章」において指摘された中央アジア・インド間の貿易の主要産品としての軍馬を扱うものである。多くの紙幅が費やされており，次の第四章とならんで本書の中心をなす章であると見なされる。研究史からしても重要な問題を含んでいるので，詳しく議論を紹介する。

本章は「南アジアにおける馬の飼養」「18世紀における馬の飼養と貿易」の二節からなる。第一節は「飼養にかかわる国際面での複合関係」「飼養にかかわるインドでの複合関係」「インドにおける品種」の小節をふくむ。著者はまず軍馬の国際的な貿易の存在意義として，数量の供給および品種の維持・改良をあげたうえで，外部からの輸入を必要たらしめる，馬飼養に不適当なインド特有の自然環境を確認する。

次にインドで用いた馬の品種についての議論が展開される。諸史料に見える馬の種類を表す名称はその由来する地域に帰せられるものが多いが，著者はそれが馬の適性・資質をしめすものであって，その馬の生物学上の品種をさすものではないと確認する。そして軍馬に適した資質という点に限ってみれば，インドにおける良質の軍馬は Tāzī(アラブ＝ペルシア馬)と Turkī(トルコ馬)とにおおまかに分けることができるという(両者いずれにも，インド土産

の馬で類似する資質を有するものが含まれる。また軍馬として資質の劣るインド土産の馬を著者は Tātū として一括する)。*Ā'īn-i Akbarī* に見える馬の品種として Tāzī と 'Arabī とがまったく異なる範疇であることもこの点から説明される。そして軍用としてはインドでは Turkī の系統の馬が主流であったという。その理由として著者は,酷使に耐える頑強な性質と中央アジアからの入手の容易さとの二点をあげる。

また著者はインドにおいて例外的に馬の飼養に適していた(すなわち良好な気候条件を有し,外来の馬を定期的に導入して資質を維持・改良することが可能な地理的位置にある)地域について「主たる飼養地は,西ガーツ山脈の向こうの Bhīma 河から Kutch, Kāthīwār, Sind を経て, Rāgasthān へと広がり, さらに Lūnī 河およびインダス河に沿って北方へ Pangāb に, さらに東方へヒマラヤへとのびる広大な辺境地帯に位置していた。こうしたインドの飼養地は,ヒンドゥークシュおよびホラーサーンのアルボルズ山脈山麓部のすぐ北に位置する中央アジアの数々の飼養中心地と結びついていた」[79] として中央アジアとの密接なつながりを強調する。

第二節「18世紀における馬の飼養と貿易」は「内陸貿易」「海上貿易」「馬貿易の量」「馬の飼養:実例2例」「馬貿易の衰退」「馬貿易と国家形成」の小節をふくむ。

「内陸貿易」では18世紀インドが,中央アジアの飼養地を中心とする家畜貿易システムの中で,軍馬の市場としてもっとも重要な位置を占めていたと前提されたうえで,中央アジアに産するトルコ馬(Turkī)をインドにもたらす内陸貿易のシステムが,主として18世紀末から19世紀初頭の英語史料に依拠しながら再構成される。トルコ馬はおもにバルフ周辺のヒンドゥークシュ北麓地域,アム=ダリヤ下流域,アンドゥホイ河流域で飼養される。馬はまずバルフ・ブハラ・ヘラートの市場で夏の間に売却される。これを買い取るのはアフガーンの商人である。このときの価格はインドでの売価の約4分の1である。このあと南方のアフガーンの牧地すなわち Kābul, Qandahār 周辺の平地帯(maydān)で売却に備えて1～2ケ月間肥育される。10-11月に商人は貿易に携わる遊牧民 Powinda とともにSulaymān 山脈を越える。これには南北2ルートが存在した。前者は Bolan 峠などを越えて Multān, Derā Ǧāt に至り, Bahāwalpur を経て Bīkāner へと達し,馬を Ǧaypur およびデッカン・南インドへと供給するもの。後者においては Ḫaybar 峠を越えた後, Pangāb の Ǧālandar Doab, Rakhī Jungle で馬を肥育して売却に備える。いずれのルートにおいても関税は馬一頭につき約40ルピーであり,この額はインドにおける売価の10%以上に相当する。これら馬商人たちは遠くは Bihār 地方の Ḥāgīpur, あるいは Madras 近くの Arcot にまで達していた。馬はこのような行程で立ち寄る各地の市場(melā)で取引された。こうした地域の馬市は外来馬の市場であると同時に地域の現地産馬の販路でもあった。馬市は外来馬の到着にあわせて秋に催されたが,現地産馬の放牧の時期のおわりにあわせて春に開かれる場合もあった。馬市の開かれる場所としては Rōhīlkhand の Haridwār のほか, Pangāb のBhatinda, Bhīma 河流域産の馬のマラータでの中心市場たる Maǧalgāõ, および Sind, Guǧarāt の土産馬の市場たる Balotra, Puškar があげられる。

上の著者の叙述で注目されるのは中央アジア産のトルコ馬が陸路で南インドの Madras にまで達している事実である。18世紀に先立つ時代の馬貿易について，南インドにおける軍馬はいずれの時代においても海上ルートでペルシア湾ないしアラビア半島から供給されたと言われてきた。16世紀前半には Gugarāt 産馬が海路を通じて南インドに頻繁にもたらされていることを示す複数の一次史料の情報が存在するが，中央アジアから内陸ルートを通じて南インドにもたらされる軍馬についての情報は管見の限り存在しない。本書の所論は，位置づけにはなお検討を要するが，注目される新たな知見である。

続いて，海上ルートを通じての馬貿易が論じられる。18世紀，海上ルートによる馬供給は内陸ルートに対して二次的であった。しかもこの時代には海上ルートによる馬の大半はペルシア湾・アラビア半島方面から来ていたのではなく，Porbandar, Gogha, Mandwī, Sonmiani といった Kāthiāwār の諸港から来て，Bombay, Cochin, Mangalore などの港で荷揚げされて，陸路で Madras に向かっていた。海路によるイランからの馬輸入が再開されるのは19世紀初頭にイギリス軍の需要を満たす必要が生じてのことである。また売価の比較および19世紀初頭における一頭あたりの輸入経費の内訳を報告する史料を根拠に，海上ルートは陸上ルートにくらべて高コストであったとされる。

ところで馬貿易の数量に関する著者の議論についていえば，海路に対して，陸路が優位なのは18世紀に限ったことではない。16世紀においても同様の関係にあったとされるのが通説である。また Kāthiāwār の諸港から馬がもたらされるようになったとする説の位置づけにはなお検討を要する。なぜならばここからもたらされる馬が Kāthiāwār 産の馬か，海路でもたらされたペルシア湾・アラビア半島の諸港からの馬の再輸出であるか判定を要するからである。Kāthiāwār をはじめ Gugarāt の諸港からの馬のこのような再輸出は16世紀において確認される事実である。すなわち著者の指摘する事実が，馬の産地の変更を意味するか，海上ルートの変遷を意味するか，きわめて微妙な問題なのである。

次に著者は馬貿易の数量的規模の確定を試みる。18世紀なかばにインドにおいて用いられていた騎馬の総数を60万頭と概算し，毎年の消耗により更新される馬を，史料の記述にもとづいて全体の10％と仮定した上で，毎年あたり６万頭の馬の新たな導入が必要とされていたことをみちびきだす。ただしこのうち外国他地域から輸入される馬がどれほどを占めていたかについて著者は示してはおらず，Tāzī 馬と Turkī 馬とあわせて３万頭であったとしているのみである。

つづいてインドにおける馬飼養の実例が Kāthiāwār , Rōhīlkhand についてとりあげられる。著者がここで注目しようとするのは馬飼養と農耕とのバランスである。一般的に，限られた地域においては両者は背馳しあう関係にあるという。この両地域に関しては，Kāthiāwār が農作に比して牧畜が大幅に卓越した地域であるのにたいして，Rōhīlkhand は農作にはきわめてよい条件を持った地域であった。しかし，Rōhīlkand ではアフガーン政権下の18世紀に，農地拡大・人口増大の一方で馬飼養活動も繁栄した。Rōhīlkhand は気候条件が馬の飼養に適

しており，農地拡大の過程においても一定量の土地が馬草のために残された。むしろ農作によって飼い葉が供給され，馬飼養は活発化したといえる。農地拡大のため，馬を廐舎に集めて狭い場所で飼養する集約的な方法が行われた。この方法は西部インド(Kāthiāwār, Sind)・アフガーニスターンにおける飼養の方法とは対照的である。

さらに Rōhīlkhand 政権が馬飼養を奨励しており，飼養に携わる在地のザミーンダールに種馬を分配していたことが例示される。生産された馬は Rōhīlla の傭兵に直接売却されたり，アフガーンの馬商人に売却されたりした。馬の資質を維持するためにパンジャーブ・アフガーニスターン・トルキスターンから外来馬が定期的に輸入されていた。輸入馬への対価は Rōhīlkhand の秋作の現金作物(インディゴ・砂糖)，および春作の作物(小麦・大麦)であった。

1774年の Awadh 政権による Rōhīlkhand 併合以後，同地域における貿易・農産・馬飼養活動はともに衰退していく。すなわち Vārānasī のラージャたちによる馬飼養の奨励や，Awadh 政権が馬商人を誘致したことによって，貿易路は Rōhīlkhand を南へ迂回して Mathurā, Farruḫābād, Kānpur を経て Lakhnaw に至るルートが活発化し，馬貿易の枢軸は Vārānasī, Awadh へ移った。さらに18世紀末から19世紀にかけてはインドの馬貿易全体が衰退していく。具体的にはそれは中央アジアからの馬輸入の激減として現れるが，著者はその原因をイギリス東インド会社の政策(インドの中で軍馬の調達を目指す)に見いだしている。

馬貿易と国家形成との関係について著者は以下のごとく説明する。戦略物資である馬とともに巡歴する馬商人たちは，傭兵や盗賊あるいはスーフィーと，多面的な姿で諸史料に現れる。Rōhīlkhand 諸政権の一つの創設者である Dā'ūd Ḫān のように，馬商人でありかつ傭兵としてその政治的経歴を始めている者がそこには多く見られる。つまり18世紀に勃興し勢力を誇ったアフガーン諸国家のほとんど全てが馬貿易のルート上に位置していたのは偶然ではない。Durrānī 朝はアフガーニスターンの主たる飼養地を管理していたし，Rōhīlkhand は先述の北まわりルートの馬供給ライン上に位置していた。この他，貿易路上にある Tonk, Bhopāl, Karnūl, Cuddapah および Kāthiāwār の Ǧūnāgadh にアフガーンの政権が存在していた。

第四章「ムガル朝下インドにおけるアフガーンの移住と国家形成」[104-143]：本章は「Rōhīlla の故地」「馬商人から君侯へ」「Hindūstān の傭兵貿易」の三節からなる。

第一節は17-18世紀にかけての Rōh から北インドへの Rōhīlla の移住の動きを明らかにするものである。当初，Qandahār 地方にいた Rōhīllaは1400-1550年の間に Peśāwar 地方に移動し，さらに17-18世紀にかけて北インドへ移住した。これらインドへの Rōhīlla移住者の大多数は Yūsuf-zai 部族に属していた。冬営地夏営地をめぐる争いによって排除されたこの部族は15世紀を通じて Qandahār から Kābul 河流域の定住地帯へ移動した。彼らは16世紀はじめ，ティムール家の Mīrzā Uluġ Bīg に追われ，Lanġānāt, Peśāwar へさらに移動した。Yūsuf-zai 部族があらたに拠った Kābul 河北岸の平原の南部は戦略的に重要であった。それは同地が Ḫaybar 峠を経由する通商路を扼する位置にあったからである。著者はさらに Ḫaybar 峠

ルートのみならず，さらにこれら Yūsuf-zai の依拠する北方の Swāt, Čitral を経由するルートの重要性を強調する。Čitral は西部ヒマラヤの商業拠点として，南東へはギルギト・カシュミール，北方へはサリコル・ヤルカンドへと繋がり，バダフシャーン・ヤルカンドなどとの活発な往来のある交差点であった。事実，18-19世紀にはバダフシャーン・チトラル経由のルートはコーカンド・東トルキスターンの混乱を避けてブハラからカシュガル・ヤルカンドに向かう商人の代替路となる。著者によれば，Yūsuf-zai 部族のインドへの移住を惹起したのは，この新たなルートを通じて活発化した貿易関係とくに軍人奴隷・馬の貿易であった。従来，Yūsuf-zai の北インドへの移住は Pešāwar の貧困から説明されてきたが，そうではなくむしろこれは17世紀後半を通じて上述のごときルートにおいて拡大していた貿易関係が，インドの活発な軍馬・傭兵市場に乗り込む機会をアフガーンの商人・傭兵にもたらした結果だと見なせるという。

第二節「馬商人から君侯へ」において，18世紀において同地に成立したアフガーン諸政権の動向が概観される。その詳細は割愛するが，総論として著者は18世紀におけるムガル朝支配の後退の中で生じたこれらアフガーン政権の成立は，ムガル朝の衰退という視点からのみでなく，政治的・経済的資源の再分配の結果として位置づけられるべきであり，かつては辺境地帯に過ぎなかった地域が経済的拡大を現出していたことを背景に把握すべきであると主張する。また著者はこれらアフガーン諸政権が1750-60年代の Durrānī 朝の度重なるインド侵攻の中で同朝に与する立場をとり，最終的にはアフガーン首長たちは Durrānī 朝の称号を得てジャーギールを与えられ，Durrānī 朝を宗主と戴く「君侯」の地位についたとして，Durrānī 朝の「帝国」におけるアフガーン諸政権の位置を確認する。

第三節「Hindūstān の傭兵貿易」は，アフガーンの移住と国家形成という本章のテーマをアフガーン傭兵の輸出入の観点から切り出そうとするものである。著者はここでインドへ向かうアフガーン傭兵を差配し指揮する仲介者の存在を指摘し，その一例としてのちに Rōhīlkhand のアフガーン首長となる Dā'ūd Ḫān を挙げる（この人物は第三章では馬商人として扱われた）。ついでかかる傭兵から組織される軍団の具体像の一部を描くことが試みられ，馬の保有・維持や俸給の支払いにかんする軍団のシステム，軍団の団結のために講じられていた物心両面における措置について述べられる。

第五章「Rōhīlla の Riyāsat」[144-159]：本章第一節「Rōhīlla の「二元経済」」は，Rōhīlkhand 諸政権下での農産の発展を扱う。著者は，複数の同時代史料に見える課税評価額を手がかりに農産の拡大を検証しつつ，第三章で触れた馬飼養活動と農産とが両立している同地の「二元経済」を描き出そうとしている。著者の示す統計データによれば，農産に対する課税評価額がもっとも拡大するのが18世紀のアフガーン諸政権の支配期である。この農産拡大の背景として指摘されるのは，農地の拡大，Rōhīlkhand 北部地域でのカーレーズ導入，穀物取引のための地域市場（gañǧ）の建設，新たな開発地に対する税優遇や徴税請負導入による開発リスクの委

任といった農作の拡大に適合した課税システム，契約労働者(ḥālī)の利用などである。

第二節「Rōhīlkhand の貿易」では 著者は，Rōhīlkhand からヒマラヤ越えのルートを通じての貿易の拡大，Bengal, Bihār, Awadh など東方から同地への織物・手工業製品や砂糖・インディゴの輸入，Delhi へのコメ・穀物の輸出などを指摘する。そして Rōhīlkhand では農産同様，貿易からの関税収入もアフガーン政権支配下で頂点にあったことを，18世紀末の Awadh 政権支配期・19世紀のイギリス支配期の統計データとの比較において指摘する。そして農産・貿易の拡大の反映として Rōhīlkhand 各地に貨幣製造所が急増したことを述べる。とくに Farruḫābād で製造される貨幣が18世紀のインドではもっとも信用性の高い通貨とされていたことはすでに著者が第四章で述べているところである[130]。

第六章「Rōhīlla の伝承の形成」[160-174]：本章の第一節・第二節ではそれぞれ，Rōhīlkhand のアフガーン諸政権を構成した Rōhīlla アフガーンの系譜(nasab)と Bangaš アフガーンの系譜とが扱われる。

議論の前提として著者は，18世紀の北インドにおいてアフガーン諸政権の成立とともにペルシア語・パシュトー語の文献が相次いで現れた一種のルネサンスの結果として，本章での中心的な史料となる *Ḫulāṣat al-Ansāb* をあげる。アフガーン政権の長たる地位にあった Ḥāfiẓ Raḥmat Ḫān が1770年に著した，アフガーン諸族の系譜を記した史料である本書は著者によれば，「Rōhīlkhand の新たな Rōhīlla の首長政権を権威づける努力」[162]であり，群盗集団ほどにしか見られていなかったアフガーンの系譜意識の保持・涵養および権威付けを目的とするものであったという。著者はこれに関連して，Ḥāfiẓ Raḥmat Ḫān をはじめとする Rōhīlla 政権のもとで Šāh Walī Allāh や彼の弟子たちが保護されていたことなどをあげて，シーア・スィク・ヒンドゥーなどの相克の中でのスンナ派復興運動の擁護者として Ḥāfiẓ Raḥmat Ḫān を位置づけている。

著者はアフガーンの系譜を Banū Isrā'īl に遡らせるよく知られた伝承を分析した上でアフガーンが当初，Kūh-i Sulaymān, Rōh といった地域と密接な関係を持っていたことを示して，同地域に領域を保っていたガズナ朝・ゴール朝のもとに参軍するアフガーンの存在を背景づける。ここで著者はこのような最初期のイスラーム史料に現れる「Afġān」が特定のエスニック上ないし系譜上の範疇を指すものではなく，数多くの様々なエスニック的要素によって構成されるアイデンティティに過ぎないとする。そしてこのような流動性ゆえにアフガーンは逆に自ら接触した他の集団を同化することができたのだという。

このような範疇の流動性を指摘した上で，Rōhīlla とは17世紀を通じて Rōh からインドに到来した人々全般を指す広範な概念であること，その Rōh の地理上の範囲が18世紀の史料である *Ḫulāṣat al-Ansāb* においては17世紀の史料よりも広範囲に解釈されており，そのことは Rōhīlla として包括される人々の拡大を意味することが述べられる。そして Rōhīlla も「Afġān」も「エスニック上の厳密な範疇ではなく，インドアフガーンについての，度重なる順

応に対して開かれた流動的な範疇を指すものである」[170]と結論される。そしてこのような範疇の拡大解釈の例として,17世紀の諸文献には見えないのに18世紀の *Ḫulāṣat al-Ansāb* にはアフガーンの一部族として言及されている部族のひとつ Bangaš を取り上げ,そのアイデンティティ形成の論理が考察される。

以上が本書の概要である。主たる関心であるインドと中央アジアとの関係という点では,本書は,最近発表されてきている諸研究(Stephen Frederic Dale, Indo-Russian Trade in the Eighteenth Century, in Sugata Bose (ed.), *South Asia and World Capitalism*, Delhi, 1990, 140-156 ; *do., Indian Merchants and Eurasian Trade, 1600-1750*, Cambridge, 1994 ; Muzaffar Alam, Trade, State Policy and Regional Change : Aspects of Mughal-Uzbek Commercial Relations, c. 1550-1750, *JESHO*, 37, 1994, 202-227.)の動向に合致する研究であるとも評価しうる。また戦略物資である馬の取引やアフガーンに代表される人の移動など,この時代に限らない重要な問題の枠組みを提出している点で示唆を受けるところは少なくない。とくに,前近代の研究に際しては中央アジアとインドとが文化的な共通世界として関連づけて研究されるべきであるとの視点には評者も賛意を表明するものである。また同時代のイギリスの関心と需要のゆえに残された膨大な史料群をもちいて行われた馬貿易の実態の再構成は,スタンダードな見解として今後の研究のたたき台となりうるであろう。

しかし本書には,議論のアウトラインを重視しすぎたためか,恣意的な断定ないしは実証不足に陥っている箇所も少なからず見られる。たとえば第二章の Durrānī 朝の帝国支配についての議論は,研究史に照らしてたしかに著者独自の主張であると見なされるが,独自であればあるほど「帝国支配」の具体的な構成要件を議論の前提として規定して,所論を従来研究の中に組み込むべきであった。またこれもアウトラインを重視した結果であろうが,問題点の取り扱いがまとまりを欠いている。この点は例えば表題に如実に現れており,1747年に樹立された Durrānī 朝を表題に掲げていながら,扱う時期は Rōhīlkhand のアフガーンたちが活動しはじめる1710年ごろからとしているごとく,スタンスの揺れはたしかに否定しがたい。

何よりも遺憾なのは,本書がインドと中央アジアとの関係史に関心を向けるものでありながら,議論の前提である,中央アジアの動向がインドに与えたインパクトがさほど具体的には明らかにされなかった点である。著者はこの点についてロシアおよび中国の中央アジアでの勢力拡大がインドに影響を与えたとしているのであるが,その影響の現れとして具体的に指摘しているのは前述のごとくインドからロシアへの正金流出のみであり,しかもこれを漠然とロシアの政策に帰しているに過ぎない。また本書で中心的に扱われた馬とアフガーンの移動も必ずしもこの観点から位置づけられているわけではない。一方,著者がしばしば援用する,北インドの経済的中心地が18世紀において従来と異なる地域にシフトしたとの説は,たしかに諸研究においてある程度主張されてきている通説だとはいえる。著者はこれとの関連において Durrānī 朝や Rōhīlkhand 諸政権の興隆を説明づけるが,このシフトの背景を中央アジ

アのインパクトに求める著者の議論はやはり飛躍的と言わざるを得ない。

とはいえこの点は，著者が本書においてはほとんど利用していない中央アジアのペルシア語史料・ロシア語史料・英語史料を利用することによって今後実証が補われていくべき問題とも言える。前二者については，上述の Dale, Muzaffar Alam によって本格的な利用がなされはじめたばかりである。とくに Dale の依拠したロシア語文書集は今後おおいに活用されねばならない一次史料群であろう（К.А.Антонова, Н.М.Гольдберг и Т.Д.Лавренцова, *Русско-Индийские отношения в. XVIIв.*, Москва, 1958 ; К.А.Антонова и Н.М.Гольдберг, *Русско-Индийские отношения в. XVIII в.*, Москва, 1965.）。